

〔研究ノート〕

## オンラインによるキャリア教育の一考察

—川柳を活用したコミュニケーション能力の育成—

江利川良枝

名古屋学院大学商学部

### 要 旨

新型コロナ（COVID-19）によりオンライン授業を余儀なくされた中で、それまで対面授業内で行なってきたグループワークによるコミュニケーション力の涵養の代替方法について考え、実践したものについての経過報告である。授業後の課題として、五七五の“川柳”で自身の思いや考えを端的に表現することと、それを共有することで他者の作品から感じられる思い（共感）に焦点を当てることで、オンライン授業におけるコミュニケーションの限界と可能性について展望する。

キーワード：キャリアデザイン，コミュニケーション，オンライン，グループワーク，川柳

## A study of online career education classes

—Developing communication skills through the use of SENRYU—

Yoshie ERIKAWA

Faculty of Commerce  
Nagoya Gakuin University

## 1. はじめに

新型コロナウイルス（COVID-19）感染者の増加により、名古屋学院大学では2020年2月25日に当面の活動方針の第一報が流れた。そこでは、出校・出勤の停止及び学位記授与式、入学式等式典、各種行事への出席停止などが記されていた。翌年度、春学期授業はオンラインで始まったものの、5月以降には対面授業が実施すると予定されていた。しかし、新たなる感染者拡大によりその後の全ての授業においてオンラインを余儀なくされた。これにより、学内ではシラバスの変更に合わせて教員のFDを実施し、学生のWeb環境の確認と整備を行なっていった。オンライン授業については、以前より使用している大学独自のオンラインシステム（Campus Communication Service 略してCCS）およびオンラインビデオ会議システム（Teams）を用いることとし、5月11日より授業を開始した。

従来、キャリアデザイン授業では講義だけでなく、グループワークやペアワークなどにも多くの時間を充ててきた。しかし、教員にとっても慣れないオンラインでのグループワークは困難であることからCCSを利用し、その中で課題の内容や提示方法を工夫することで、学生のコミュニケーション力の涵養に幾何かの教育効果が得られたと思われるため、本稿にて紹介したい。

## 2. 従来のキャリアデザイン授業について

本学では、全ての学部学科を対象に、1年次は春学期・秋学期にキャリアデザイン1a・1bを、2年次は同様にキャリアデザイン2a・2bを開講している（但し、理学療法士や学校教諭などの免許取得を目的とする一部の学部はキャリアデザイン1aのみ指定科目）。一学年約1500名、1クラスあたり60～90名を専任教員2名、非常勤講師8名の計10名で一般企業勤務を経験した者や国家資格キャリアコンサルタントの資格保持者が担当しているが、それ以外は心理学や教育学、経済学や経営学などを背景としているため、共通のシラバスやキーワードで内容に統一感を持たせながら、それぞれの切り口で講義を行なっている。

1aの講義概要としては、そのシラバスの中で“充実した大学生活を送り、また、卒業後は一人前の社会人としてスムーズに第一歩を踏み出すことができるように、それに必要な基礎的資質やスキルを養うことを目的とし、最初に学生自身の「今」を見つめることからスタートし、大学4年間の過ごし方や3年生後半以降の就職活動、そして就職後の長い人生にまで、考えるテーマを徐々に広げていき（ライフキャリアに焦点をおき）、1bでは“働くこと”について考えること、多様な働き方の多くを提供している企業のしくみや成り立ちの理解を深めたうえで、「働くこと」への現時点でのビジョンを描く（ワークキャリアについて学びを深める知識を得る）”といったことを述べている。これを基本に、キャリアデザイン2a・2bでは次年度からの就職活動を視野に、1a・1bでの学びの応用を行なっている。

平成22年に経済産業省は日本人学生と企業を対象に「自分に不足していると思う能力要素と学生に不足していると思う能力要素」について調査しており、その中で「主体性」や「コミュニケーション力」「粘り強さ」に大きなギャップが見られたことが報告されている（図1）。

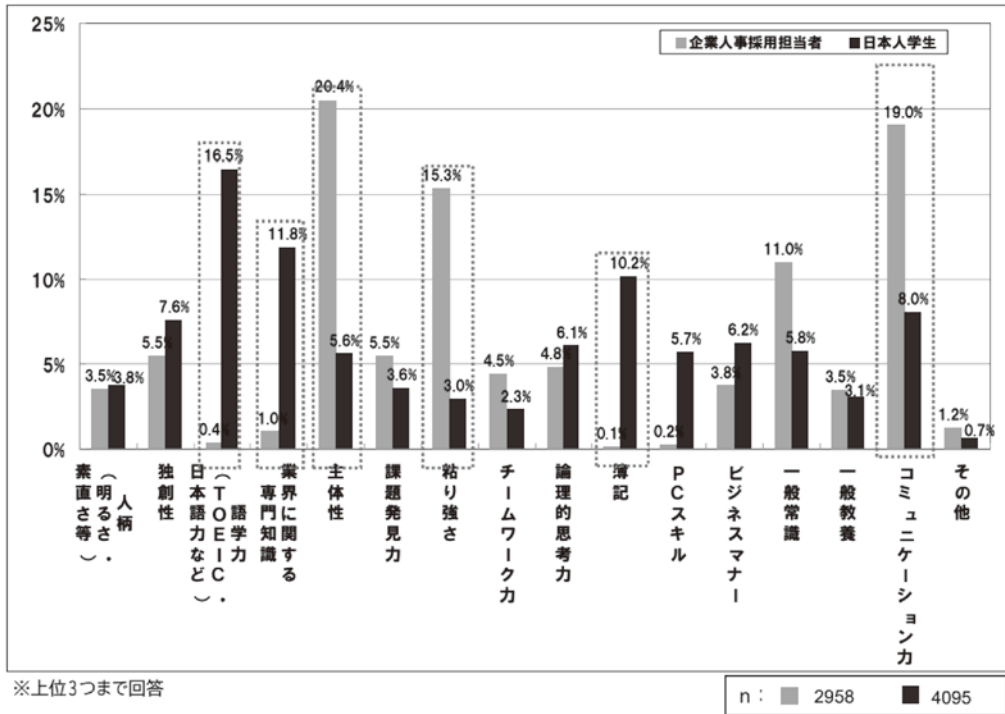


図1 「自分に不足していると思う能力要素と学生に不足していると思う能力要素」 経済産業省（平成22年）より

そこで、学生たちの一人ひとりが充実した大学生活を送ること、そして、卒業後には社会人としてスムーズな第一歩を踏み出すことができるよう、それに必要な基礎的資質やスキルの涵養を目的としていることから、それぞれの授業内ではグループワークやペアワーク、全体発表なども行ない、座学で得た知識を実践することで、学生の学びをより深め、実生活や実社会で活かせる内容にも工夫している。

また、授業外では（筆者は1aを5クラス、1bを4クラス、2a・2bをそれぞれ4クラス、週に8クラスから9クラスを担当）キャリアカウンセラーでもある筆者の元には対面授業日で研究室在室の際には連日のように学生が訪れて、授業やインターンシップ、留学や資格取得、就職活動など多岐にわたる学生生活の過ごし方に加え、将来のことを不安に思っ相談にくる面談の多くに時間を費やしてきた。その内容は、他学生の抱える悩みや不安に重なる部分も多いことから、相談者の承諾を得たうえで、次回の授業内において（匿名で）相談内容やその回答を伝え、情報を共有したりもしてきた。

受講した学生からは「十人十色の性格の人間がいる中で様々なテーマに沿って話し合うことで自分が知らない事柄を初対面の人と共有することができる授業であった」「人前で話す機会を与えられたり、自分についてもう一度見つけ直すことができたので良かった」「コミュ障（コミュニケーション障害）だと思っていたが、仲間前で意見を言い、最終的には全員の前で話ができるようになった」等の好意的な意見が多く見られた。但し、ここに至るまではグループワークやペアワークを行なう

えでのルールを丁寧に説明した後に、段階を踏んだコミュニケーションワークを行ない、自分自身の意見や考えを発言して良いのだと思える場づくりをしてきた結果でもある。

### 3. オンラインでの双方向授業を見学して

Teamsを使った双方向授業やグループワーク実施なども視野に入れたうえで、K大学のチームビルディングプログラムや本学の入学前講座「プレスクール」といったZoom使用による双方向授業やグループワークを見学した。見学にあたっては、ブレイクアウトルーム（グループ分けされた小部屋）を見て回れるように依頼して、対面授業とオンラインにおける学生のグループ内での態度や行動について観察した。観察にあたって、注視した点は大きく以下の4点である。

- ①授業運営するうえでの適正受講者数
- ②対応する講師およびアシスタント（スチューデントアシスタントを含む）の人数とその役割
- ③ブレイクアウトルームに配置されてからの講師およびアシスタントの動きと介入
- ④ブレイクアウトルームでの学生たちの様子や態度・姿勢

K大学のチームビルディングプログラムおよび本学のプレスクールのいずれも、学生たちは最初にZoomのメインルームに集合した後に、講義形式で、ブレイクアウトルームへの移動、グループワーク時のルールや方法等のガイダンスが行なわれた後に、各ルームへと移動した。

また、ガイダンス中は学生たち全員がビデオもマイクもオフの状態で行なわれ、ブレイクアウトルームに移動後はいずれも互いの顔の表情や様子が分かるようにオンにして行なっていた。

K大学のチームビルディングでは、いくつかの学部の学生が選択できる共通授業の初回における学部と学年を超えて（1～2年で選択可）、また本学プレスクールでは同学部内の新入生同士の、いずれもプログラムの目的としては人間関係づくりであった。そこでのプログラムはいずれもプレタイム社の「記者会見」という自己紹介的なワークを使用し、1クラスあたり40人～60人を5人ずつのグループに分け、グループ内のメンバー間で一人ずつ順番に一定時間（ここではいずれも7分/人でグループでのワークの時間は誤差を含め40分に設定されていた）でインタビューをしていき、グループ内の全員がお互いを知り合うものである。また、インタビュー内容は予め構成されたものの中からインタビューする順番が回ってきた学生が選び、回答するメンバーに質問する形式をとる。

どちらもメイン講師に加えて、オンライン補助要員（講師に準ずるファシリテーションが可能）がそれぞれ2名付いていたので、メインルームとブレイクアウトルーム間の移動についても、また途中で通信状況の不具合から落ちてしまった学生の再入室の際にもスムーズな対応ができていて、申し分のない運営だった。

観察によって、特に対面授業でのグループワークと異なる点については表1の違いが認められた。

この違いは、今までグループワークを取り入れた対面授業を行なってきた筆者がオンライン授業にグループワーク取り入れることを考えるうえで、非常に不安を感じるものとなった。初年次学生の中には自身のコミュニケーション力に不安を持つ学生も多く、また初対面の学生同士を対面授業の形式のままブレイクアウトルームに送り出すのは放り出すことに等しいようにも感じられた。

表1 観察による対面授業とオンライン授業のグループワークの違い

	対面（グループワーク）	オンライン（ブレイクアウトセッション）
①受講者数	60～90名	40名～60名
②授業運営	教員1名（+SA1名）	教員1名+オンライン補助2名+ $\alpha$
③講師の動き	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 全体の様子が見渡せる</li> <li>• 気になるグループに即時介入できる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ブレイクアウトルームに入っていない限り様子が分からない</li> </ul>
④学生の様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ワークを行ないながら質問があれば即時教員に質問できる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ルールや方法を聞き逃しや分からないとワークが頓挫する</li> <li>• 通信環境によってワーク途中で落ちると話し合いが止まる</li> <li>• 対面時より雑談やフリーライドが増える</li> </ul>

#### 4. オンラインでのキャリアデザイン授業の実践

キャリアデザイン授業は前述のとおり、限られた教員数で全学生を対象に行なわなければならないことや、グループワークを多用してきたことなどの理由から講義中心の授業形態にするために、オンライン授業を行なう上でまずシラバスを大きく変えざるを得なかった。しかし、その中でかつての授業アンケートで学生たちから得られた意見である

- 自分が知らない事柄を初対面の人と共有することができる授業
- 人前で話す機会を与えられたり、自分についてもう一度見つけ直したりできた

や、自身の意見やコミュ障に不安を抱える学生たちのために、段階を踏んだコミュニケーションワークを行ない、自分自身の意見や考えを発言して良いのだと思える場づくりをいかに盛り込んでいくかを考えていった。

講義中心の授業形態になったことから、授業配信の基本形として、音声入りパワーポイントを授業曜日の午前中（9時前後を目安に遅くとも10時までに）CCSを使用し、授業連絡としてOne Driveからの共有を行ない、オンデマンド形式（学生が受講したい時間に映像コンテンツを視聴できる）にした。通常の授業時間はキャリアデザイン1a・1bは学部によって、2限（10:45～12:15）、3限（13:00～14:30）または4限（14:15～15:45）に、キャリアデザイン2a・2bは5限（16:30～18:00）に担当されているため、いずれもかなり早い時間からの配信となることは懸念したが、1年次や2年次は受講科目が多く、そのほとんどがオンライン授業であることを考慮し、学生の受講状況や生活ペースを鑑みたくて決めた。但し、このあたりの決定はキャリアデザイン授業では教員ごとに判断を任せられたため、全教員が同様ではなく、通常の授業時間に配信した講師もいたことを付け加えておく。

学生たちの意見にあった自分が知らない事柄を初対面の人と共有できることや、人前で話す機会を与えられたり、自分についてもう一度見つけ直すこと…ということでは、自分の意見を何らかの方法で提出し、それをクラス全体に公開する必要がある。そこで、CCS内のMinutes Paper機能を使用することにした。CCSのMinutes Paperでは記述だけでなく、単一選択や複数選択などのアンケート的な質問も作成できるため、段階を踏んだコミュニケーションワークを行ない、自分自身の意見や考え

を発言して良いのだと思える場づくりの観点から、まずは授業内で扱ったテーマについて単一または複数選択で回答する質問を作成し、クラス内で公開することを伝えた。公開は円グラフで翌週の授業で復習に加えて、結果について解説することで意見の多様性を認められるよう促した。何度か繰り返したのちに、「人前で話す」ことに近い方法を考え、学生たちにコロナ禍における学生生活の今を川柳にして詠むことを思いついた。

十六代尾藤川柳によると、Web川柳博物館の中で俳句と川柳の違いについて、俳句は季語を用い、主に自然や風景を対象に詠むことが中心となり、川柳では人を対象に切り取ることが中心となり、詠ずるのではなく「吐く」「ものす」と書いている。コロナ禍で不自由な学生生活を余儀なくされている学生たちにとって、まさに本音を「吐く(吐露する)」ことが必要だと感じられたからである。

キャリアデザインの第5回授業で、1aでは「コミュニケーション」について行なった中で、端的に自身の伝えたいことを伝える場面があることを、また、2aでは「自己理解」について行なった中で、自身の価値観に目を向けることを扱った流れで、その日のMinutes Paper課題を「これまでの授業や大学生活、コロナの状況を踏まえて考えてきたこと川柳にして自分の気持ちを表してみよう」とし、クラス内で公開することも含めて提示した。

すると、1年生は課題の提出率が非常に高く、5クラスの平均で97.5%の提出率であった。提出されたもの全てをテキストマイニングで分析(スコア順)したところ、図2のような結果となった。

全体的にオンラインや自粛、ステイホームといった言葉に併せて、友達(友)、大学などの文字も見られる。共起回数で表すと、図3ようになった。

要約すると、大学(という新しい環境)で友達ができるのかに不安を抱える様子や、コロナのせいで大学生という実感が湧かないこと、また大学の授業全体がオンラインで課題が大変なことや、自粛により外出できないことをつまらなさがかうかえる。

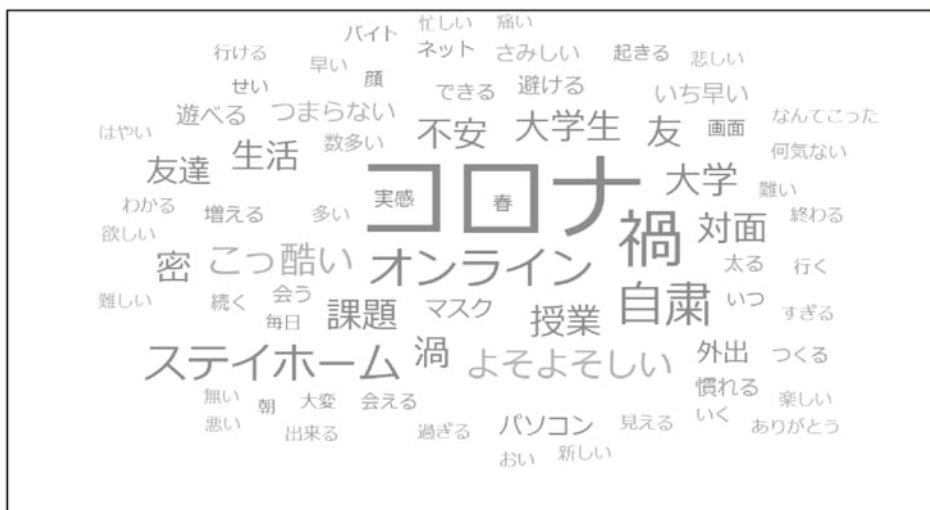


図2 キャリアデザイン1aの川柳のテキストマイニング

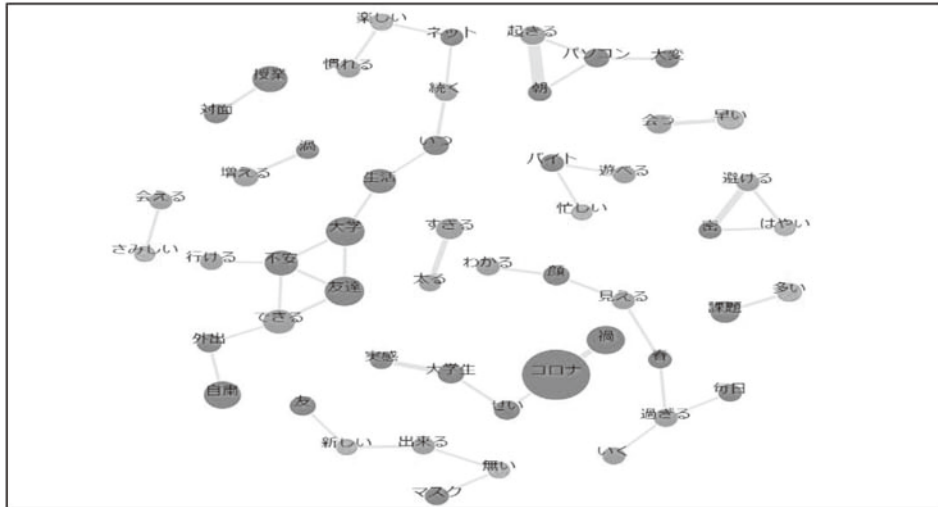


図3 キャリアデザイン1aの川柳の共起回数

また、公開された句をさらに共有するために、学生たちには翌週の Minutes Paper 課題にて自身の句以外で共感できたものから一句を選び、選出理由を書かせた。

- ・大学生 実感湧かない 3ヶ月
- ・パソコンと 日中向き合う 家の中
- ・休みたい あの頃口に 出してたな
- ・画面越し 何をするにも 無表情
- ・会いたいな 顔も知らない 君たちに (全て学生の許可を得て原文のまま掲載)

などがベスト5となった。学生から提出された川柳全体をテキストマイニングから読み取ると、前述のような要約になり、ネガティブな印象になるものの、学生たちの共感という点では、必ずしも一致するわけではないことが分かる。一方、2年生では図4のような結果となった。

2年生の方はオンラインや自粛に併せて、課題、アルバイト、いそがしいといった文字も見られる。

図5をもとに同様に要約すると、オンラインでの授業でレポートや課題が多く、またアルバイトなどもあって忙しい様子や、せっかく大学でできた友人たちに会えないさみしさ、外出できずにひきこもった状態であることがうかがえる。1年生同様、公開された句をさらに共有するために、学生たちには翌週の Minutes Paper 課題にて自身の句以外で共感できたものから一句を選び、選出理由を書かせた。2年生のベスト5は以下である。

- ・友達に 会いたい思い 募る今日
- ・オンライン 意味もわからず 一時間
- ・オンライン ふと気が付けば また課題
- ・おはようと 話す相手は スクリーン
- ・頑張るよ 未来の自分 待ってね (全て学生の許可を得て原文のまま掲載)

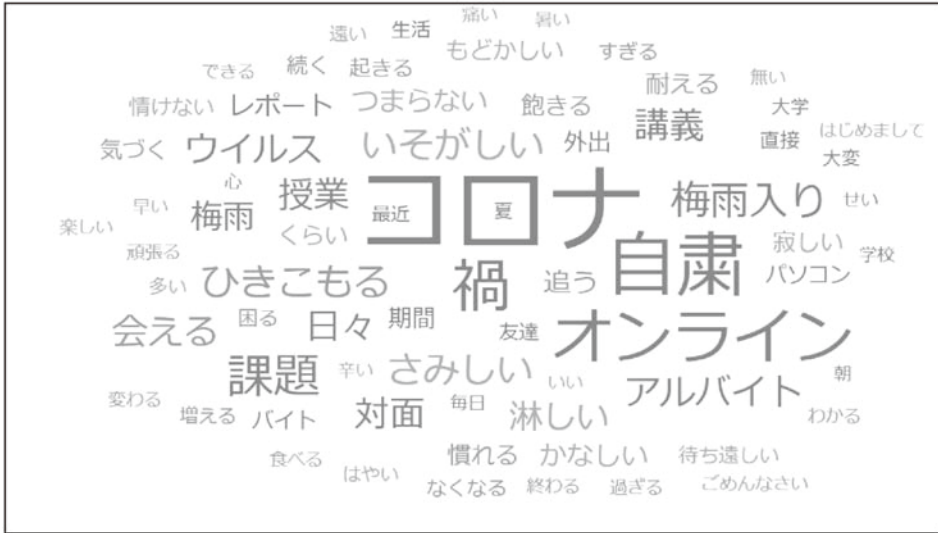


図4 キャリアデザイン2aの川柳のテキストマイニング

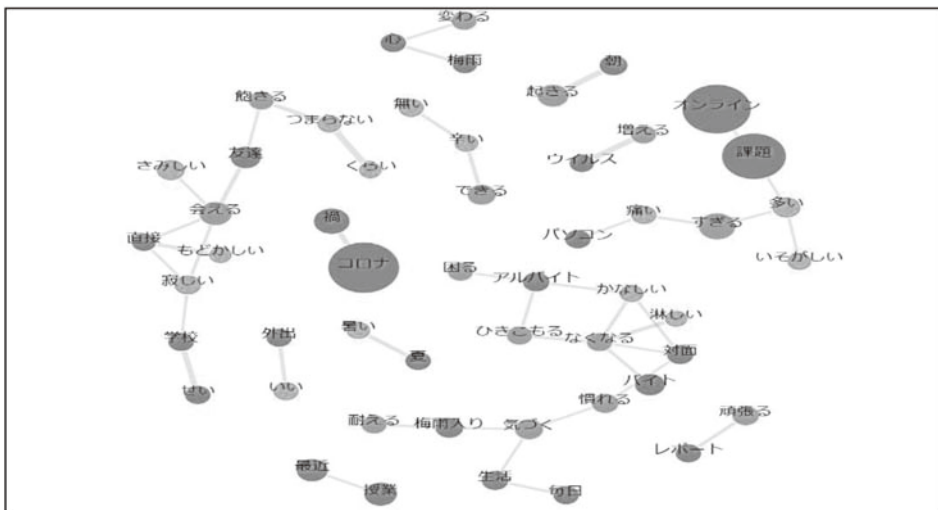


図5 キャリアデザイン2aの川柳の共起回数

いずれも要約ではネガティブな印象になるものの、学生たちの共感という点においてはさみしさや不安、慣れないオンライン授業で苦労しながらも、それ以上に川柳がもつユーモアや人情といった特徴から希望を感じさせる句への共感がうかがえる。

オンラインでできるコミュニケーションを川柳の課題を通して行なってみたわけだが、この課題に対して、学生たちは「自分の思っていることを17文字で端的に表すことができることの難しさ」と、「コロナ禍において同じ経験をしているからこそ、クラスの仲間がつくった川柳の背景にあるものに共感できる」、またその「表現の豊かさに感動した」、「ますます対面授業で会えることが楽しみになっ



た」などがコメントとして書かれていたことは、キャリア教育としてもコミュニケーションの育成として見ても、幾何かの成果と言えるだろう。

## 5. 今後の課題と展開

キャリア教育=コミュニケーション教育ではないが、キャリア教育においてコミュニケーション能力の育成は重要であることから、COVID-19によってオンライン授業を余儀なくされた今年度授業においては、授業の最後に五七五の“川柳”を課した。それを通して、学生が自身の状態や思い、考えを端的に表現すること、それを共有することで他者の作品から感じられる思い（共感）に焦点を当てることでオンライン授業におけるコミュニケーション学習を試みることができたことに加え、期待以上に学生が17文字で自身の状態や思い、考えを端的に表現することができたと実感している。だが一方で、確かにCCSを利用すること、そして教員が仲介することで学生間の考えの橋渡しや文字としてのコミュニケーションは図れたが、今回の課題だけではコミュニケーションがもつ瞬発力のようなことはできなかった。しかし、これも今後の工夫次第で可能であると考えている。

通信環境が悪いというだけでなく、オンラインでのコミュニケーションの難しさからカメラやマイクをオンにできない学生も少なくないと聞く。また、筆者を含め限られた教員数で授業を運営しなければならない状況の方が圧倒的に多いだろう。だからこそ、今回のような方法を使いながら応用しながら、授業運営の方策を考えていく必要がある。瞬発力のコミュニケーションも、ビデオやマイクをオフにしたままでオンラインを使用することが可能であれば、授業時間のリアルタイムにその状態にし、五七五の川柳で書いた思いをグループ内で連句のような形式で（ルールは簡易化して）つないでいき、一つの作品を作っていくということも考えられるだろう。

CIVID-19によるオンライン授業は大学教育にも新たな可能性を与えた一方で（グループワーク等を実施するうえでの）、ある程度の限界も分かった。これは大学の授業に限ったことではなく、学生らが就職活動時に経験する企業人事担当者とのオンライン面接も6割近くが実施と言われている。また、他大学でグループワークを導入した授業を行なっていることも聞くが、従来の教員数と従来の定員数で従来の内容を補完できているかと言えば、恐らく否であろう。オンライン授業におけるグループワークでできない部分はサポートする側の人数を増やすか、受講者数を減らすしかないし、オンラインで行なう以上、対面と全く同様にはできないのは致し方ない。しかし、諸事情により教員数を増やすこと、受講者数を減らすことのいずれも不可能であれば、できる形に変えていくしかない。コミュニケーション力の涵養という意味では、バーバルに限ったことではなく、ノンバーバル部分も重要であることから、その側面からも実践に繋がる、しかもオンラインでできる内容が期待できる。時代の流れから考えても、対面とオンラインのハイブリッド型で授業を行なっていく可能性も考えられるため、学生たちのコミュニケーション能力の育成につながるさらなる内容や方策を考えることに併せて、学生の反応を調査・分析していきたい。

## 参考文献

- 岩本武範（2017）『なぜ僕は4人以上の場になると途端に会話が苦手になるのか』サンマーク出版  
坂田哲人・中田正弘・村井尚子・矢野博之・山辺恵理子（2019）『リフレクション入門』学文社  
佐藤美文（2012）『川柳を考察する—かつてはあった路地の親切』新葉館出版  
辻大介・是永論・関谷直也（2014）『コミュニケーション論をつかむ』有斐閣

## 参考HP

- 経済産業省 大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査資料（201006daigakus  
einosyakaijinkannohaakutonintido.pdf）2020年12月28日閲覧  
日本最大級の人事ポータルHRPro（[https://www.hrpro.co.jp/research\\_detail.php?r\\_no=273](https://www.hrpro.co.jp/research_detail.php?r_no=273)）2020年12月28日  
閲覧  
Web川柳博物館（[www.doctor-senryu.com/01\\_museum/0\\_senryu-haiku.html](http://www.doctor-senryu.com/01_museum/0_senryu-haiku.html)）2020年12月28日閲覧